



親鸞聖人報恩講

この世の旅の
あけくれに
さびしいのちを
嘆くとき
南無阿弥陀仏
となえれば
親鸞さまは
寄り添って
わたしの手をと
り
歩まれる

(讃仏歌 しんらんさま)

親鸞聖人を宗祖と仰ぐ浄土真宗にとって、一番大切に勤められてきた報恩感謝の集い「報恩講」を、今年もお迎えすること心よりありがたく思います。

「報恩講」は皆さまもご存じの通り、親鸞聖人のご遺徳を偲びそのご生涯を通して、阿弥陀如来のお救いをあらためて心に深く味あわせていただくご法要(ご法事)です。

* * *

親鸞聖人ご自身は、お寺を建てるとか、宗派を築くということを目指されたお方ではありません。聖人自身が、師と仰がれた法然上人の仰せに従い「たとえ地獄に落ちようとも後悔はしない」とまで言い切って、お念仏、絶対他力の信心を貫いて生きるそのお姿で、お念仏の仲間、同朋、同行を導きお育て下さっ

たお方です。

そのような親鸞聖人を慕って、聖人ご往生の後、33回忌にあたり、本願寺第3代覚如上人が、そのご遺徳を讃仰するために、『報恩講私記』を作られ、以来、ご命日の法要は、今生かされ生きる私たちが、正しくお念仏のいわれを聞かせていただき、我が身のことといただいて、真実信心の念仏者になることが、聖人のご恩に報いることであり、またお念仏とともにある日暮らしを伝えて下さった先に往生された多くの仏さま(ご先祖)が願っておられる「報恩感謝」のご法事として毎年大切に勤められ、私たちがお勤めする家庭のご法事のもつ意味にもなっているのです。

* * *

親鸞聖人の味あわれたお念仏のみ教えは、お釈迦さまの説き明かされた阿弥陀如来の本願のお救い(願い)絶対他力の教えです。その教えは、七高僧の教えを承けた宗祖親鸞聖人によって、浄土真宗というご法義(教義)として明らかにされ、先にお浄土に往生された私たちに繋がる数多くの仏さまに支えられ、今に生きる私に至り届けられてきたのです。

私たちは今幸いにその流れを受け継ぎ、お念仏とともにある「いのち」をありがたく喜び、そのご法義を未来へと伝えて、

自分にとって大切な人や有縁の人々が迷いのない人生を歩いていってくれることを願って尽くしていかなければなりません。

* * *

ご本山、全国、海外の別院、末寺、宗門に関連する教育機関、そしてご家庭で勤められる報恩講は、「ほんこさん」と親しみをもって呼ばれ、9歳でのご両親との別れと得度、比叡山での厳しい修行と悩み葛藤、法然の選ばれた絶対他力の教えとの出遇い、権力からの弾圧で流罪になった新しい土地での暮らしや伝道など、聖人のご一生をお聞かせいただきます。それも報恩講の伝統の素晴らしさです。

しかし、私たちが偲び慕うのは、そのような物語の聖人ではありません。親鸞聖人が、

「五劫思惟の弥陀の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなり」

と喜ばれたように、お念仏のみ教えは、門信徒も僧侶も皆同じ、御同朋、御同行として一人一人のためのみ教えをいただき受け継ぐことです。

我が身のゆく先や社会や次世代が不安だと嘆く前に、まず私自身が今あるいのちを喜ばせていただき、御恩報謝の歩みをさせていただきましょう。

どうぞお参り下さい。

合掌

龍溪寺 奏庵
親鸞聖人報恩講

日時
11月26日(日)
午前11時～
「真宗宗歌」
正信偈
住職法話
ご俗鈔拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき
抹茶お接待

気候もこの季節らしく定まり秋の深まりを感じさせ報恩講を迎えます。北海道の自坊の報恩講も例年の初雪の中ではなく穏やかな気候に恵まれ無事勤めてまいりました。

浄土真宗にとって、報恩講を毎年勤め終えることは、ありがたい喜びであり、次への歩みを踏み出す力となります。そのご勝縁を皆さまとともにお勤めさせていただきます。

どうぞお参り下さい。

【光の中に】

ほのぼのと散りゆくいのち
花びらを両手にうけて
ああ すみわたる
空のひろさよ
おおらかな光の中に
親鸞さまはおわします

すこやかにみなぎる力
よろこびを両手にうけて
ああ そびえたつ
山のすがたよ
ひとの世の闇路をてらし
親鸞さまはおわします

惜別

寝付けぬ夜ふと気になってバンクーバーの親友にメールを送った。その返信はワイフからの夫リチャードが今朝亡くなったとの知らせだった。私が首に抗がん剤、鼻に酸素を繋がれて入院中、頻繁にメールをくれて力づけてくれた。彼も長い糖尿病の人生で人工透析の日々だった。何度となく生死をさまよい、メールの中には「先生は坊主だから、今度は連れて往け」のジョークもあった。5年ほど前来た際、名古屋のホテルで低血糖症を発症した彼のカナダ帰国に手を貸したのが会った最後になった。「もうちょっと生きてお浄土には一緒に往こう」という二人のお浄土への珍道中は叶わぬことだったが、その思いは必ず果たせる。

See you again in
Buddhaland with Gattsho

隣や階下と壁や床を接し、隣家との間もほとんど無いアパートの一室に、9体もの解体された遺体が発見された。自殺願望があったとはいえ殺害された人たちのご遺族、それまでその地に平穩に暮らしを営んでいた人々の心境は察するに余りあり、「おぞましい」とはこのことだ。■短期間に9人を手にかけることができたことに、ネット社会の闇の深さを感じるが、ネットを駆使用する犯人とネットに依存する被害者の間では、歪んだ欲求を満たす相手を探すのは簡単だったことがわかる。「自殺」「安楽死」などを検索すると次々繋がり、事件発覚直後でありながら半日で50以上のアクセスがあったとある記者は書いている。■今この時にも、世界中、日本中、暮らしている社会、さらにもっと我々の身近なところに、非現実な世界を独りネットで覗く人間の姿を想像するのは決して気持ちのいいものではない。■犯人は「首吊り士」というアカウントも持っていた。全員がほんとうは死にたいと思っただけで、いかなかったと犯人は供述しているというから、ネットの世界では、「首吊り士」という邪悪な言葉のもつ現実が想像できなくなっていたということだろう。■そういえば、元々「士」は、天子や諸侯に仕え官位に就き庶民の指導的立場にある人のことなのに、今ではいろんな職種が「〇〇士」と変えられている。保母さんは保育士、付添さんは介護士、葬儀屋さんには納棺士もいる。■本来こういう行為は、資格なんかなくても、共に暮らす人と人との愛情や責任で行われてきたもので、それが血の通った人間関係の証だったが、専門化されたものにだけ任せていく中では現実感が失われていきがちになる。苦悩する者が求めているのは、身近な人が気付いてくれること、手を差し伸べてくれることだろう。それが血の通わないものを挟んでは決して得られない彼らの求めている「救い」だと思ふ。■ちなみに我々の「し」は、布教使、開教使など、「使」が使われる。教を間違ひなく伝える「使い」であって、自分勝手な解釈や上からものをいう立場ではないことを忘れないためだ。 Norimaru

